

特集

専門医に聞く

自己診断テスト付

# 「認知症」の基礎知識

なかのせいご  
**中野 正剛氏**

医療法人新産健会  
LSI札幌クリニック  
もの忘れ外来診療部長



内閣府が発表した「高齢社会白書」（2017年版）によると、65歳以上の認知症高齢者の数は4年後の2025年には730万人と推計され、高齢者が全人口の30%を超える超高齢化社会を迎える中で、高齢者の5人に1人は認知症になると言われており、早急な社会対応が求められる。

そこで認知症の権威として全国的に知られる医療法人新産健会LSI札幌クリニックもの忘れ外来診療部長の中野正剛氏に認知症治療の現状と対策についてわかりやすく解説してもらった。

## 「まろ」と「からだ」の症状

——認知症の種類は。

認知症は、認知機能の低下があつて、そのため職業上、日常生活上の活動がさまざまな形で制限されていくのが国際的な定義になっていきます。心理検査の結果、脳の働きが低下していて誰かの助けが必要になるのが認知症です。

認知症にはいろいろなタイプがあり、「アルツハイマー型認知症」がすべての認知症のおよそ50%と最も多く、次にⅡ「レビー小体型認知症」（20%前後）、Ⅲ「血管性認知症」（15%程度）、Ⅳ「前頭側頭型認知症」（10%

未満）の順になっていきます。

血管性認知症は1980年代の日本では最も多いといわれています。ただ現在でも若年発症（42〜64歳）の人は、血管性認知症が多いといわれています。これら4つのタイプを「4大認知症」と呼んでいます。

——症状は。

認知症の症状は、おおまかに①「こころの症状」と②「からだの症状」に分けられます。①「こころの症状」は、さらにA「認知機能の低下」（かつての「中核症状」とB「行動と

心理の症状」（かつての「周辺症状」、最近では「B PSD」）に分けられます。

A「認知機能の低下」は心理検査でわかりません。アルツハイマー型認知症の場合には、「記憶が障害される」、「判断力が低下する」、「問題解決能力が低下する」、「込み入った作業ができなくなる」、「ものの区別がうまくつかなくなる」、「ボキャブラリーが低下する」、「言葉の意味がわからなくなる」、といった脳の働きが低下する症状です。

## 被害妄想や「幻覚」症状も

B「行動と心理の症

状」は、感情意欲の障害でうつが出てきたり、無関心になったり、幻覚妄想が出たりします。幻覚妄想がよく知られるのは「被害妄想」や「嫉妬妄想」。誰かに「物を盗まれた」、「隠された」とか「配偶者が浮気している」、「自分は施設に入れられるのではないか」という妄想です。

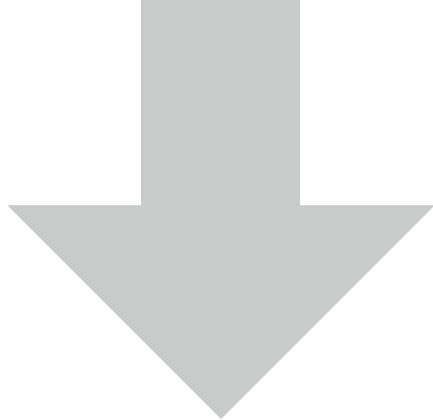
「幻覚」では「いない人の姿が見える」、「動物が見える」などの「幻視」、「人の声（ヒソヒソ話）が聞こえる」、「テレビやラジオの音が聞こえる」などの「幻聴」もあります。

また「音楽性幻聴」といって炭坑節や演歌、民謡が聴こえるもので、高齢の女性に多いです。そのほか匂い（花や線

香、焦げ臭さ）などの「幻臭」や「幻触」（からだの上を虫がはうなど）、「足やお腹が痛い」、「胸が苦しい」、「息苦しい」などの「痛み」の幻覚もあり、内科や整形外科で診てもらっても身体的な問題がまったくない場合もあります。睡眠の問題では、レビー小体型認知症では睡眠障害が起きやすい。

行動の症状では、「徘徊」や意味のない行動を繰り返す「仮性作業」があります。「仮性作業」というのは、引き出しや財布、カバンの中などを開けたり閉めたりすること。

あとは「多弁」や用もないのにやたらと歩き回る「多動」、そして食べてはいけない物



続きは『月刊クオリティ』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)